

まさに保守中興の祖

齋藤邦吉

大平さんが幹事長を引き受けられて間もないころである。「選挙対策本部長を僕がやることにしたよ」と、副幹事長の私にポツンといわれた。一瞬私はハツとした。「逆転必至といわれる五十二年参議院選挙の総責任者になるなんて、この人は何を考えているのだらう」と、大平さんの顔をみたが、いつものおりの表情で、別に何の説明もされない。「大胆なのかな」、それとも「自信でもあるのかな」と思ったが、五十二年末の状況で、自民党が逆転を阻止できるという情報は何もいそのころであった。

それから半歳、公認候補者の人選、資金集め、地方の決起大会など党運営の激務の間に選挙準備は着々と進められた。難問が生ずるたびに相談すると、大平幹事長は言葉少なに指示されるだけで、全く動ずる色がない。自民党不利という情勢のままにとうとう公示も半月後に迫り、気が気でなくなった私は「幹事長、選挙公約やスロ―ガンを早く決めないと……」と促すと、大平さんは「あれはいいんだよ」と悠然としている。遠謀深慮な大平さんのこと、何ごとか胸中に秘めておられることと思つてはみるが、一抹の不安は消し難かった。

ところが、公示は切迫するのに何も動く気配がない。党として何も準備をしないままに選挙に入ってしまった。全国遊説、情報の分析、地方との応接に忙殺されて一日一日と経っていく。野党は政策やスロ―ガンを打ち出すが、与党が政策を出さないために、新聞紙面を大きくにぎわすような論争にはならない。とうとうそのまま投票日を迎えてしまった。開票の結果は新聞の予想を覆してわが党の勝利に終わった。選挙期間中を通じ泰然として

いた大平さんは、選挙結果が判明したとたん「よかったなあ」と一言いってホッとしたように私の手を握った。そのとき私は、選挙政策もスローガンも出さないことが幹事長の初めからの戦略であったことを理解した。

今にして思えば、あの保革逆転を阻止した参議院選挙が、政治の流れを変えた転換点であった。東京都知事選をはじめ大阪、京都、沖縄と革新首長の牙城をめぐる攻防が相次いだ。大平幹事長に率いられたわが党は、連戦連勝であった。この一つ一つの勝利の積み重ねは、当時土俵を割る瀬戸際まで追いつめられていたわが党の黨員に、どれほど希望と勇気をとりにとどさせてくれたことだろう。今日では保守回帰といわれ、わが党の基盤は磐石であることはいわれるが、それは一人の偉大な指導者の知謀の限りをつくし、心身をすりへらして切り開いた努力の結果であった。このような大平総理の労苦の上に、時代はさらに多くの負担と忍苦を要求した。伯仲時代の厳しい与野党折衝、日本全土をまきこんだ予備選挙、四十日抗争、党内の大量欠席により不慮にして成立してしまつた内閣不信任案、国政史上初の衆参同時選挙への突入、よくもあれだけ重苦しい事件が相次いだものである。あのなかで大平総理は努力の限りをつくし、どれだけ心身を痛めたことが。

その忍苦の果てに自らの身をもつて同時選挙の勝利をあがない、もろもろの怨恨を洗い流して去っていかれた総理であった。それ故に大平総理こそは保守中興の祖であるといえよう。この一事をもつて大平総理の政治家としての偉大さが偲ばれるが、私がただ頭を下げざるをえないのは、なんびとも及ばない人格であった。あの対立と怨恨の渦のなかにあつて、総理は人を怨まず、憎まず、最後まで大局を見失われることがなかつた。痛憤もあつたであろう。受けた傷も深かつたであろう。しかし、大平総理は重い責務を一身に負い、極限まで努力されつくしたのである。キリスト者の人生を貫き徹された大平総理の生涯に心打たれ、私は、この人と身近に働くことのできた日々にはただ感謝するばかりである。

(衆議院議員・前自由民主党幹事長)